

## 書評 BOOK REVIEW

スティーブン・ブリッグズ ほか〔編〕

高野 晶〔訳〕

## 自殺と自傷

——精神分析的視点からの治療・予防・ポストベンション

A5判上製・岩崎学術出版社

2025年2月刊

定価5,500円（税込）

評者＝高橋あすみ（北星学園大学）



本書は自殺や自傷を精神分析的アプローチから捉えた、22名の執筆者による論集である。原書は、2006年にロンドンで開催された自殺志向性と精神分析に関する国際会議をもとに3名の精神分析家が編集し、2008年に刊行された。評者は長年、精神分析的立場から自殺の臨床や執筆に取り組む医師の高野晶氏である。

全体は「理論の発展」「実践」「実践・予防・ポストベンションにおける応用」の3部構成で、多様な臨床事例が紹介されている。評者と同様、精神分析に明るくない読者にとっては読解に難しい部分もあるかもしれないが、Freudの「喪とメランコリー」、Melanie KleinやBionの理論、エナクトメントといった基本概念は予備知識を蓄えておきたい。訳者あとがきは理解の助けになるだけでなく、訳出にかけた覚悟と真摯な姿勢を読み取ることができ、本書としぶと向き合う勇気を与えてくれる。

“suicidality”に対する「自殺志向性」という訳語は、ある人の自殺にまつわる行動や思考の時間的過程を含意する象徴的な概念である。その背景には、良い内的対象の不在や外的な愛着対象との関係の喪失、心的外傷の影響を捉える視点がある。自殺や自傷は「行動化」の一形態とされ、言語化されにくい内的苦痛の表現として理解される。そのプロセスにおいて、自殺の空想に特徴づけられる「自殺志向性のところ」と、解離、身体感覚や痛みへの鈍さ、身体への無関心といった「自殺志向性のからだ」——対人関係理論における「自殺潜在能力」を想起させる——を二元的に捉える視点も興味深い。

このような深層を扱う臨床において重要とされるのが、転移・逆転移関係の理解と、それらを受け止め自ら

のなかに保持し、クライアントに安全に伝え返す「コンテイン」の作業であることが繰り返し論じられている。ここでは特に、学生の自殺予防に携わる立場として印象に残った第14章「侵されずに心動かされていることについて——学生相談において自殺志向性の考えをマネージすること」（Ann Heyno著）を紹介したい。大学のカウンセリング機関は「全学生の自殺を防ぐ責任がある」という万能的な空想を投影される存在となりやすい。そのなかでカウンセラーは、自殺志向性をもつ学生に対する自殺の危険への不安は逆転移によるものであると理解し、その感情に侵されることがなく、なお心をも動かされ続けることが大切である。すなわち、逆転移に注意を払いながら学生の自殺志向性をコンテインすることが、学生の堪え難い感情の言語化を助け、行動化の危険を低下させる鍵となる。評者がこれまで重視してきた「自殺に関する対話」という営みも、こうしたしなやかな容器としての役割を担うことだと捉えると、より構造的に理解しやすいと気づかされた。

本書との対話そのものが、読者にとって自殺と向き合う内的作業を促す体験ともなろう。精神分析を学ぶ臨床家だけでなく、自殺志向性のある人と向き合うあらゆる心理職にとって、臨床への深い洞察を得る手がかりとなる一冊である。

- 原書：Stephen Briggs et al. (Eds) (2008) *Relating to Self-Harm and Suicide : Psychoanalytic Perspectives on Practice, Theory and Prevention*. Routledge.